

タガログ語の *sarili* の記述的研究*

林真衣

maimaimaingay@gmail.com

キーワード：タガログ語 内容語 機能語 再帰 所有 文法化 借用 コーパス

要旨

タガログ語の *sarili* は内容語としての側面をもつ上に、再帰を表したり所有の強調を表したりする機能語としても働く重要な語である。しかし、*sarili* の使用実態の全体像はこれまで必ずしも明らかにされてこなかった上に、内容語としての *sarili* と機能語としての *sarili* では使用頻度や現れる統語的位置が異なることがデータの観察から予測される。そこで本論文では、タガログ語の *sarili* が実際にどのように使用されているかをコーパスデータから記述・分析する。分析を通して、タガログ語の *sarili* には (i) 「自分」用法、(ii) 所有用法、(iii) 再帰用法があることを明らかにする。3つの用法のうち「自分」用法の *sarili* は主要部で、所有用法では修飾部で現れ、再帰用法の *sarili* は主要部でも修飾部でも出現する。節内の出現位置についても、用法ごとに大きく異なる傾向があることを指摘する。このように再帰用法と所有用法に加えて *sarili* の「自分」用法を新たに切り出し、それぞれの用法の特徴を記述し分布をはじめて量的に調査することで、タガログ語の *sarili* が内容語から機能語へと文法化している可能性を提示する。

1. はじめに

オーストロネシア諸語の一つでありフィリピン共和国マニラ首都圏などで話されるタガログ語の *sarili* という語は、マレー語の *sendiri* を語源とする借用語であり (Blust 2013: 578)、さまざまな用法をもつ。それらの用法の1つに再帰がある。再帰は、動作主の被動者への行為が、動作主と被動者が同一指示であるために、動作主自身に返ってくるような事態のタイプを意味する (Zúñiga & Kittilä 2019: 152–154)。(1) は *sarili* が再帰を表している例である¹。

- (1) *T<in>anong ko ang aking sarili kung kaya ko na ba?*
<PV.RL>ask 1SG.GEN NOM 1SG.LOC.LK self COND can 1SG.GEN IAM Q
'I asked myself if I can manage.' (twitter.com)

* 本稿に関する内容については以下の方から貴重な意見をいただいた: 鈴木唯、谷川みずき、長屋尚典、諸隈夕子、吉田樹生 (敬称略)。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。

¹ タガログ語の正書法では /y/ を *ng* と記す。ただし、属格標識 /*nan*/ も *ng* で、複数標識 /*maná*/ は *mga* と表記する。

(1) では、属格の動作主句 *ko* ‘I’ と主格の被動者句 *ang aking sarili* ‘myself’ がともに話者を指示しており同一指示である。意味としては、動作主から被動者に *tinanong* ‘asked’ という行為がなされているが、動作主と被動者のどちらも話者であるために、話者が話者自身に質問する形で行為が返っていることを表現している。タガログ語には文法的に再帰を表す方法が *sarili* を用いる以外になく、*sarili* は再帰を表す唯一の機能語としての役割を担っている。

さらに、*sarili* は所有表現にも用いられる。以下の (2) は一人称単数属格形の人称代名詞 *ko* ‘my’ で既に示されている所有者を強調している。

(2) *Nakatira na ako sa sarili ko=ng bahay.*
resident IAM 1SG.NOM LOC self 1SG.GEN=LK house
‘I live in my own house.’ (twitter.com)

(2) では、*bahay* ‘house’ を所有しているのが他の誰でもなく話者自身であることを *sarili* によって明示している。ここでは動作主と所有者は同じく話者を指示し同一指示の関係にあるものの、何らかの行為が動作主自身に返ってくる事象は表現されていない。したがって、再帰とは異なる用法である。所有用法の *sarili* は、再帰という意味としての事象のタイプを表すわけではなく、機能語として同一指示の所有者を強調するのである。

sarili が再帰や所有を表す構文で用いられることは先行研究でも指摘されているが (Schachter & Otones 1972: 138-139)、どちらにも当てはまらない *sarili* の用例も観察される。(3) の用例を参照してほしい。

(3) *Ano na nang-yari sa sarili ko?*
what IAM AV.RL-happen LOC self 1SG.GEN
‘What happened to me?’ (twitter.com)

(3) では、人称代名詞 *ko* ‘my’ に修飾された *sarili* を主要部とする名詞句 *sarili ko* ‘myself’ が、話者その人自身を指示している。節内に同一指示の2つの対象が存在しないため再帰的な事象を表現しておらず、所有表現でもなく、*sarili* によって表されているのは語彙的な意味での「自身」である。再帰用法と所有用法の *sarili* は機能語としての役割を担っていた一方で、(3) での *sarili* は「自身」を意味する内容語である。機能語は閉じた語類で属する語の数が少なく、抽象的な意味を表す。一方、名詞や動詞などの内容語は開いた語類で属する語の数が多く、具体的な意味を表す (長屋 2015: 96)。*sarili* の用法は機能語から内容語まで大きく異なっているのである。

このように幅広い用法をもつ *sarili* という語に着目した研究を行うべき理由は2点ある。第一に、*sarili* が実際にはどのような用法で使用されていて、どのような統語的位置に現れるかといった実態が明らかになっていない。質的かつ量的な調査を行い *sarili* の使用実態を明らかに

することは、タガログ語に関する知識のギャップを埋める重要な課題である。第二に、タガログ語の *sarili* の研究は *sarili* およびその語源である語の意味変化の経路を捉える上で必要不可欠である。タガログ語の *sarili* はマレー語からの借用語である (Blust 2013: 578)。そのため、*sarili* の用法を詳細に記述することによって、マレー語からの借用と *sarili* の意味変化の関係を捉える糸口となることが期待できる。

タガログ語の *sarili* 自体の記述に注力した研究はこれまでされてこなかった。参照文法である Schachter & Otnes (1972) では、*sarili* が再帰構文と所有構文の2つの構文で用いられることは言及しており、*sarili* の「自分」用法の存在は指摘していない。Kroeger (1993) は、再帰用法の *sarili* をタガログ語における主語性のテストに用いており、複数ある *sarili* の用法には注目していない。

そこで本論文では、タガログ語の *sarili* がどのように使用されているかをコーパス調査によって探究する。コーパス調査を採用したのは、話者よって自然に産出されたコーパスデータを調べることで、*sarili* の新たな用法や指摘されていなかった特徴を発見できると考えたからである。今回の調査では *sarili* がどのような用法をもつか、どのような統語的位置に現れるかという2つの観点を明らかにすることで、タガログ語の個別言語的研究への貢献を試みる。

調査の結果として、タガログ語の *sarili* が「自分」用法、所有用法、再帰用法の3つの用法をもつことを示す。さらに、3つの用法のうち「自分」用法の *sarili* は全て主要部で、所有用法では修飾部で現れ、再帰用法の *sarili* は主要部でも修飾部でも出現するという結果を提示する。節内の出現位置についても、用法ごとに大きく異なる傾向があることを明らかにする。

本論文の構成は以下の通りである。最初に、第2節でタガログ語と *sarili* の背景知識を導入する。第3節ではコーパスを用いた方法論を提示する。第4節で *sarili* の3つの用法を提案し、第5節では各用法と統語論の関係を分析する。第6節では、*sarili* がどのように使用されているかを結論付け、*sarili* が3つの用法をもつことについてタガログ語内での意味変化という文法化の仮説とマレー語からの借用という言語接触の仮説を議論する。最後に、第7節で本論文をまとめる。

2. タガログ語と *sarili* の背景

本節では、まず第2.1節でタガログ語の基本情報を、つづいて第2.2節で *sarili* の背景知識を導入する。

2.1. タガログ語の基本情報

タガログ語は、フィリピン共和国マニラ首都圏で話されているオーストロネシア語族西マレー・ポリネシア語派の言語である。基本語順は VSO または VOS であり、述語が節の先頭に出現し、指示的な名詞句は格標識によって節に導入される。タガログ語の動詞は、動作主ヴォイス、被動者ヴォイス、場所ヴォイス、状況ヴォイスの4つのヴォイスを区別する。被動者ヴォイスと場所ヴォイスの動詞を述語とする節をそれぞれ (4) (5) に例示する。

- (4) *B<in>ili ng lalake ang isda sa tindahan.*
<PV.RL>buy GEN man NOM fish LOC store
'The man bought the fish at the store.' (Foley & Van Valin 1984: 135 グロスを変更)
- (5) *B<in>ilh-an ng lalake ng isda ang tindahan.*
<RL>buy-LV GEN man GEN fish NOM store
'The man bought fish at the store.' (Foley & Van Valin 1984: 135 グロスを変更)

(4) の動詞 *binili* 'bought' は被動者ヴォイスの語形で *isda* 'fish' が主格である一方、(5) の動詞 *binilhan* 'bought' は場所ヴォイスの語形で *tindahan* 'store' が主格である。

格標示に関しては、語用論的に卓立性の高い項が主格標示され、主格標示されない項は属格または場所格で現れる。例えば、(4) では被動者 *isda* 'fish' が主格標示され、それ以外の動作主 *lalake* 'man' は属格、場所 *tindahan* 'store' は場所格で現れている。(5) では場所 *tindahan* 'store' が主格標示され、動作主 *lalake* 'man' と被動者 *isda* 'fish' はともに属格で現れている。

タガログ語では属格標識は項に対する格標示だけでなく、名詞句内で所有が表現される場合にも用いられる。(6) のように、所有者を表す名詞 *Maria* は所有物を表す主要部名詞 *pagkain* 'food' を修飾する。なお、所有者を表す名詞は属格標識 *ni* で標示され、所有物を表す名詞の後ろに現れる。

- (6) *pagkain ni Maria*
food GEN.P M.
'Maria's food'

所有者が人称代名詞で表されている場合には、人称代名詞の属格形か場所格形で所有物の主要部名詞を修飾する。同じ 'his/her food' という意味を表していても、(7) のように人称代名詞が属格形の場合には名詞 *pagkain* 'food' を後置修飾し、(8) のように場所格形の人称代名詞の場合には前置修飾する。

- (7) *pagkain niya*
food 3SG.GEN
'his/her food'
- (8) *kanya=ng pagkain*
3SG.LOC=LK food
'his/her food'

2.2. *sarili* の背景

sarili は主要部でも修飾部でも出現する。まず、*sarili* は所有物を表す主要部名詞を修飾することができる。その場合、属格形の人称代名詞であれば (9) のように、*sarili*、人称代名詞、名詞という語順が一般的である。一方で、場所格形の人称代名詞であれば (10) のように、人称代名詞、*sarili*、名詞の語順になるのが一般的である。

- (9) *sarili* *niya=ng* *pagkain*
 self 3SG.GEN=LK food
 ‘his/her own food’
- (10) *kanya=ng* *sarili=ng* *pagkain*
 3SG.LOC=LK self=LK food
 ‘his/her own food’

(9)(10) では、所有物を表す名詞 *pagkain* ‘food’ が主要部で、それを修飾する *sarili niya* ‘his/her own’ または *kanyang sarili* ‘his/her own’ は修飾部にあたる。

さらに、*sarili* は修飾部だけでなく主要部でも現れる。その場合、(11)(12) のように属格形か場所格形の代名詞が *sarili* を修飾する。

- (11) *sarili* *niya*
 self 3SG.GEN
 ‘him/herself’
- (12) *kanya=ng* *sarili*
 3SG.LOC=LK self
 ‘him/herself’

(11) では属格形の人称代名詞が *sarili* を後置修飾し、(12) では場所格形の人称代名詞が *sarili* を前置修飾している。(11)(12) はどちらも、人称代名詞と「自身」を表す要素から成る英語の再帰代名詞 *oneself* と類似した形式になっている。

sarili が主要部で現れる場合、*sarili* は (11)(12) のように代名詞によってのみ修飾される。一方で (13)(14) のように、代名詞以外の属格標示された名詞が *sarili* を修飾することはできない。

- (13) **sarili ni* *Maria*
 self GEN.P M.
 Intended for ‘Maria, herself’

(14) **kay Maria na sarili*

LOC.P M. LK self

Intended for ‘Maria, herself’

sarili の出現位置のまとめとして、タガログ語の人称代名詞のパラダイムと、それぞれ形式の *sarili* との語順を表 1 に提示する。表 1 の縦の行は人称代名詞の人称・数の違いを、横の列は人称代名詞が属格形か場所格形かの違いを表している。

表 1. 人称代名詞のパラダイムと *sarili*

	人称代名詞が 属格形	人称代名詞が 場所格形
1SG	<i>sarili ko</i>	<i>aking sarili</i>
2SG	<i>sarili mo</i>	<i>iyong sarili</i>
3SG	<i>sarili niya</i>	<i>kanyang sarili</i>
1PL.INCL	<i>sarili natin</i>	<i>ating sarili</i>
1PL.EXCL	<i>sarili namin</i>	<i>aming sarili</i>
2PL	<i>sarili ninyo</i>	<i>inyong sarili</i>
3PL	<i>sarili nila</i>	<i>kanilang sarili</i>

表 1 は例えば、一人称単数属格形の人称代名詞 *ko* が *sarili* を修飾する場合は *sarili ko* という語順になる。

ただし、タガログ語では人称代名詞が省略されることがある。それは *sarili* を含む句においても同様である。(15) を参照してほしい。

(15) *sarili=ng pagkain*

self=LK food

‘own food’

(15) のように、所有を表す名詞句で代名詞を用いずに *sarili* のみで主要部名詞を修飾することがある。このような場合、所有者は文脈によって決まる。

3. 方法

本論文では、コーパスから得られたタガログ語の *sarili* の用例について質的・量的調査をおこなう。調査には、Sketch Engine (Kilgarriff et al. 2014) のウェブコーパス Tagalog (Filipino) Web 2019 (t1TenTen19) を使用した。このウェブコーパスは、ブログ、ニュースサイト、インターネット百科事典などから集められたタガログ語のテキストから成る。2019 年時点でウェブ上に存

在していたテキストが収集されており、総語数は 198,303,250 語である。

コーパス調査の対象は *sarili* を語根とする全ての単語とした。*sarili* の派生語を含めて調査するのは、どれだけの用例が *sarili* 自体を語として使用しているかを知るためである。手順としてはまず、コーパスで *sarili* を含む語を検索した。具体的には、ある語が文脈の中でどのように使われているかを検索できる Concordance で、CQL [lemma="*.s(in)?a(sa)?rili.*"] と検索した。* はどのような文字がいくつあってもなくてもよく、(in)? (sa)? はそれぞれの文字列が 1 つあってもなくてもよいという検索式である。例えば、*sarili-hin* ‘to appropriate’ という語の場合、不定相であれば *sarili-hin* (self-pv) で現れ、継続相であれば *s<in>a-sarili* (<PV.RL>CONT~self) という語形で現れる。* と (in)? (sa)? を検索式で用いることによって、*sarili* に接辞が付与されたり重複したりしている上記のような語形を全て検索結果に含めることができる。

そして、Sketch Engine の機能を使い、検索結果からランダムに 1,000 例を抽出した。1,000 例をスプレッドシートでアノテートし、質的・量的に分析した。質的・量的分析としては、最初に 1,000 例のうちどれだけの用例で *sarili* がそれ自体で語として使用されているかを分類した。語として使用されている *sarili* は 1,000 例中 972 例あり、*sarili* が語根として用いられていた残りの 28 例には 7 種類の派生語が含まれていた。それらの派生語としては、最多 12 例の *pan-sarili* ‘personal’、5 例の *maka-sarili* ‘selfish’ や *mag-sarili* ‘to become independent’ などが使用されていることが確認できた。

次に、*sarili* が派生語の語根として使われていた 28 例以外の 972 例、すなわち、*sarili* が自立した語として用いられていた 972 例を観察し、*sarili* にどのような用法があるかを分析した。*sarili* の用法として (i) 「自分」用法、(ii) 所有用法、(iii) 再帰用法に分類することを、第 4 節で提案する。

最後に、自立した語としての *sarili* の用例 972 例をアノテートし、アノテートしたそれぞれの項目の分布を調査した。アノテートした項目としては、*sarili* の用法、*sarili* が主要部か修飾部か、*sarili* を含む句が節のどの位置に現れるかの 3 点である。用法をアノテートすることで、*sarili* がどの用法で多く使用されているかを量的に調査する。さらに、*sarili* が主要部か修飾部か、節内のどの位置に現れるかについては、各用法と統語的位置の関係を探ろうとするものである。

節内での *sarili* を含む句の出現位置としてアノテートしたのは、主格、属格、場所格、存在述語に後続する位置、その他の位置である。具体例は第 5.2 節でそれぞれ、主格 (29)、属格 (27) (31)、場所格 (26) (30)、存在述語に後続する位置 (28) に示す。その他の位置の具体例としては (17) (19) を参照してほしい。

4. *sarili* の用法

本節では、*sarili* の 3 つの用法を提案し、各用法の特徴と分布を示す。*sarili* が語として用いられていた 972 例を観察した結果から、*sarili* の用法として (i) 「自分」用法、(ii) 所有用法、(iii) 再帰用法に分類することを提案する。まず、第 4.1 節で「自分」用法、第 4.2 節で所有用法、

第 4.3 節で再帰用法の特徴を記述する。最後に、第 4.4 節で *sarili* がどの用法で多く用いられていたかについての分布を報告する。

4.1. 「自分」用法

ここからは、*sarili* の 3 つの用法それぞれの特徴を記述する。1 つ目の「自分」用法は、*sarili* が「自分自身」を意味する内容語としての用法である。この用法の *sarili* は、何らかの叙述や事象に当面しているのが他の誰でもないその本人であることを表現する。コーパスからの具体例を (16) に示す。

- (16) *Kamangmangan at kamalian nga ang laman ng sarili kung di*
 ignorant and fault indeed NOM content GEN self COND NEG
 <um>a-ayon sa riyalidad.
 <AV.RL>CONT~agree LOC reality
 ‘Your inside is full of ignorance and fault when you do not accept the reality.’ (blogspot.com)

(16) では、*sarili* を含む属格句は文脈次第で本人が決まるような「自身」を表している。(16) で表されている状況に当面する対象は誰しも *sarili* の指示対象「自身」になり得る。

以下の (17) のように、*sarili* を含む句が文頭の位置に現れている指定文も「自分」用法の一例である。

- (17) *Sarili ko na ang kalaban dito.*
 self 1SG.GEN IAM NOM enemy this.LOC
 ‘The enemy here is me.’ (blogspot.com)

(17) では、主格名詞句が叙述する *kalaban* ‘enemy’ という属性をもっているのが、*sarili ko* ‘myself’ が指示する話者自身であることを表している。このように、「自分」用法の *sarili* は内容語として、他者ではない「自己」という具体的な意味を表現している。

4.2. 所有用法

2 つ目の *sarili* の所有用法は、既に示されている所有関係における排他性を表す用法である。(18) を参照してほしい。

- (18) *Tulong-an ninyo sila=ng ma-mingwit ng sarili nila=ng isda.*
 help-LV 2PL.GEN 3PL.NOM=LK AV-fish GEN self 3PL.GEN=LK fish
 ‘Help them to fish their own fish.’ (blogspot.com)

(18) で示されている所有は、「彼/彼女ら」が所有者で、*isda* ‘fish’ が所有物であるという関係である。ここでの *sarili* の役割は、*isda* ‘fish’ の所有権をもつのがそれ以外の何者でもない「彼/彼女ら」であることを明示することである。動作主と所有者は同じ指示対象であるものの、行為が動作主自身に返ることが表現されているわけではなく、*sarili* は所有者を強調しているのみである。

再帰用法と違って、同一指示の対象が節内に存在していない用例もある。再帰用法については次節で詳しく説明することとし、ここでは所有用法の例を (19) に示す。

(19) *Ang wika=ng Filipino ay sarili nating wika.*
 NOM language=LK Filipino PRED self 1PL.INCL.GEN.LK language
 ‘Filipino is our own language.’

(19) では、*wika* ‘language’ の所有者が話者を含む複数人の対象であることが *sarili natin* ‘our own’ で表されており、その対象は節内で他には存在していない。フィリピン語という言語が話者たちによって排他的に所有されていることを表現している。

所有用法には、*sarili* によって対比の意味が表出する用例もある。(20) を参照してほしい。

(20) *Mas malapit siya sa kanya=ng pinsan kaysa sa sarili=ng mga kapatid.*
 more near 3SG.NOM LOC 3SG.LOC=LK cousin than LOC self=LK PL younger.sibling
 ‘He/She is closer to his/her cousin(s) than his/her own younger siblings.’ (filipinostories.com)

(20) では、「いとこ」も「兄弟」も親族関係である点では共通している。一方で、*pinsan* ‘cousin’ は人称代名詞による修飾で所有関係を表し、*kapatid* ‘younger sibling’ は *sarili* による修飾で、「彼/彼女」によって排他的に所有されていることを強調しているという違いがある。所有用法の *sarili* は、「いとこ」と「兄弟」の親族関係における近さを対比させているのである。このように、所有用法の *sarili* は機能語として、対比の解釈をも生じさせる所有関係の排他性という抽象的な意味を表している。

4.3. 再帰用法

3 つ目の *sarili* の再帰用法は、動作主の行った行為が動作主自身に戻ってくる事態を表す用法である。動作主と被動者が同一指示であるために、動作主の被動者への行為が動作主自身に戻ることを意味するのが再帰である (Zúñiga & Kittilä 2019: 153)。再帰を表す場合、(21) のように *sarili* は被動者句に現れる。

(21) *Na-kita ko ang sarili ko sa luma=ng salamin.*

NVOL.PV.RL-see 1SG.GEN NOM self 1SG.GEN LOC old=LK mirror

‘I saw myself in the old mirror.’ (blogspot.com)

(21) では、属格動作主句 *ko* ‘I’ と、*sarili* を主要部とする主格被動者句 *ang sarili ko* ‘myself’ がともに話者を指示しており同一指示である。さらに、動作主が被動者を *nakita* ‘saw’ という行為が、どちらの参与者も話者自身であったために、動作主自身に返ってくることを表している。このように *sarili* は機能語として、再帰という抽象的な意味を表す。

sarili を含む句と同一指示の名詞句は、節内で必ずしも明示的に示されない。以下の (22) に例示する。

(22) *Mayroon kami=ng impluwensya sa iba at kontrol-in ang*

EXS 1PL.EXCL.NOM=LK influence LOC other and control-PV NOM

ating sarili.

1PL.INCL.LOC.LK self

‘We have influence on others and let’s control ourselves.’ (innerself.com)

(22) の後半の節では、*kontrolin* ‘control’ の動作主句は明示的に示されておらず、被動者である *sarili* を含む句のみが主格で現れている。節における *sarili* の存在によって、明示的に示されていない動作主が被動者と同一指示であることや、再帰的な事態を表していることが判断できる。

再帰用法の *sarili* が用いられるのは動詞述語文に限らず、動詞以外の述語によっても再帰的な事象は表現される。*sigurado* ‘sure’ を述語とする (23) を参照してほしい。

(23) [...] *hindi ako sigurado sa aking sarili.*

NEG 1SG.NOM sure LOC 1SG.LOC.LK self.

‘I am not sure about myself.’ (pinoverotica.com)

(23) でも、節内に同一指示の2つの句 *ako* ‘I’ と *aking sarili* ‘myself’ があり、話者が話者自身について *sigurado* ‘sure’ であるかどうか認知していることを表現している。厳密には行為でなくとも、動作主と被動者が同一指示であり動作主自身に返ってくるような事態を表す用例は再帰用法として分析できる。

全体部分関係を表す名詞句において *sarili* が修飾部で現れる用例でも再帰が表現される。用例を (24) に示す。

(24) *Ang anak din ay na-tuto=ng t<um>ayo sa sarili=ng paa, [...]*
 NOM child too PRED AV.RL-learn=LK <AV>stand.up LOC self=LK foot
 ‘It is also my child who learned to stand up with his/her own feet.’ (blogspot.com)

(24) では、*sarili* が主要部名詞 *paa* ‘foot’ を修飾している。意味としては、所有者の *anak* ‘child’ と所有物の *paa* ‘foot’ がそれぞれ全体と部分の関係にある。「立つ」という動作を働きかけるのは「子ども」でありながら、実際に動作を実行するのは「子ども」の一部「足」であり、動作の影響は「子ども」に返ってくる。このように、再帰を表す *sarili* は主要部だけでなく修飾部でも現れ得る。

4.4. 用法の分布

コーパスデータの観察結果に基づいて提案した (i) 「自分」用法、(ii) 所有用法、(iii) 再帰用法のうち、どの用法で *sarili* が多く用いられていたかを示す。調査対象 1,000 例のうち、*sarili* が自立した語として用いられていた 972 例を 3 つの用法に分類した。各用法の分布は表 2 と図 1 の通りである。

表 2. 用法の分布

「自分」用法	57 (5.9%)
所有用法	347 (35.7%)
再帰用法	568 (58.4%)
合計	972 (100.0%)

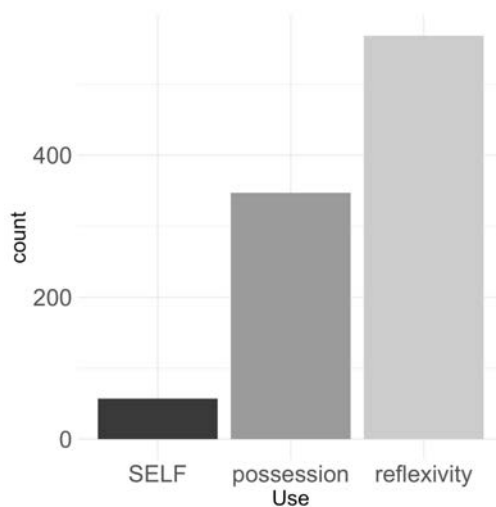


図 1. 用法の分布

表2と図1を見ると、*sarili* の用例のうち58.4%と半数以上は再帰用法で、ついで所有用法の用例も豊富に観察された。3つの用法の中で「自分」用法の用例は相対的に少ない。すなわち、*sarili* は再帰を表す機能語として中心的に使用されている。

5. *sarili* の統語論

本節では、前節で提案した *sarili* の3つの用法がどのような統語的位置に出現するかを分析する。統語的位置については、第5.1節で *sarili* が主要部になるか修飾部になるかを明らかにし、第5.2節で *sarili* が節内のどの位置に現れるかの結果を示す。

5.1. 主要部か修飾部か

3つの用法ごとに、*sarili* が主要部である用例と修飾部である用例の分布を表3と図2に提示する。

表3. 主要部と修飾部の分布

	主要部	修飾部	合計
「自分」用法	57	0	57
所有用法	0	347	347
再帰用法	557	11	568
合計	614	358	972

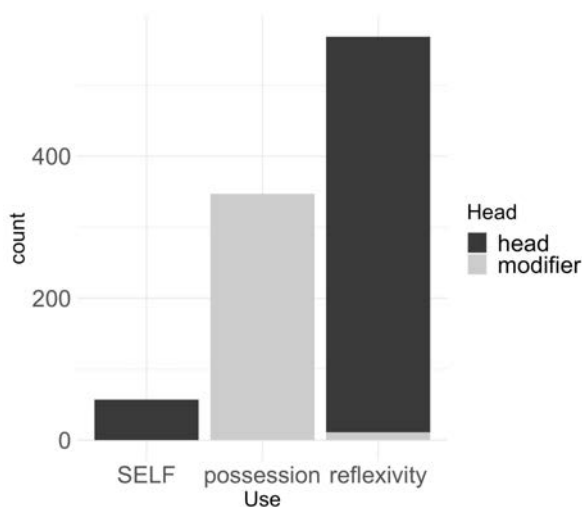


図2. 主要部と修飾部の分布

表3と図2から、「自分」用法の *sarili* は主要部でのみ現れ、所有用法では修飾部で現れることが分かる。再帰用法では、*sarili* が修飾部になることもあるものの、大半は主要部で現れる。

それぞれの具体例については、自分用法で主要部は (16) (17)、所有用法で修飾部は (18)~(20)、再帰用法で主要部は (21)~(23)、再帰用法で修飾部は (24) を参照してほしい。このように、*sarili* が句のどの位置に出現するかは用法ごとに大きく異なる。

「自分」用法の *sarili* が修飾部に現れる用例と、所有用法の *sarili* が主要部に現れる用例が観察されなかったという結果について分析する。まず、「自分」用法の *sarili* が修飾部に出現することは原理的にないものとする。*sarili* が修飾部で現れると、名詞句全体の指示対象は所有物にしかなり得ない。その場合、*sarili* を修飾部とする名詞句の意味は「自分自身」にはならないため、「自分」用法で *sarili* が修飾部に現れる用例は存在しないと分析できる。

次に、所有用法の *sarili* が主要部に現れる用例が発見されなかったのは、文法や意味による制限ではなく頻度の問題である。所有用法の *sarili* が主要部に現れる用例は Schachter & Otnes (1972) で報告されている。(25) を参照してほしい。

(25) *Sarili ko ang bahay.*

self 1SG.GEN NOM house

‘The house is my own.’ (Schachter & Otnes 1972: 138 グロスを変更)

(25) は、人称代名詞に修飾された主要部 *sarili* が文頭の述語の位置に現れており、節全体で所有を表現する叙述所有である。所有用法の場合、*sarili* が修飾部だけでなく主要部で現れることも可能であるにもかかわらず、今回調査した用例では *sarili* が修飾部に現れる所有用法のみが観察されたということである。

一方で、再帰用法の *sarili* は主要部でも修飾部でも出現する。*sarili* を主要部とする句の指示対象が被動者で、それが動作主と同一指示である場合には再帰的な事態が生じる。*sarili* が修飾部で現れると、名詞句全体の指示対象は所有物になる。その一部は、全体部分関係の部分にあたる所有物を指示している。全体にあたる所有者が動作主で、部分にあたる所有物が被動者である場合には、被動者に対する行為が結果として動作主自身に帰ってくることになる。そのため、再帰用法の *sarili* は修飾部でも現れることができる。

このように、*sarili* の用法が違えば、出現する統語的位置も異なる。「自分」用法の *sarili* が修飾部に出現することは原理的になく、全て主要部で現れていた。所有用法の *sarili* は原理的には主要部でも出現できるが、今回の調査では修飾部でのみ現れた。再帰用法の *sarili* は主要部でも修飾部でも出現したが、主要部に大きく偏っていた。*sarili* が主要部になるか修飾部になるかは、用法ごとに大きく異なるのである。

5.2. 節内の出現位置

節内で現れる位置についても、3つの用法で異なる傾向が観察された。*sarili* を含む句の出現位置としてアノテートしたのは、主格、属格、場所格、存在述語に後続する位置、その他の位置である。各用法での *sarili* の出現位置の分布は表4と図3のようになった。

表 4. 出現位置の分布

	主格	属格	場所格	存在述語	その他	合計
「自分」用法	8 (14.05%)	8 (14.05%)	35 (61.4%)	0 (0.0%)	6 (10.5%)	57 (100.0%)
所有用法	75 (21.6%)	97 (27.9%)	112 (32.3%)	44 (12.7%)	19 (5.5%)	347 (100.0%)
再帰用法	271 (47.7%)	33 (5.8%)	254 (44.7%)	1 (0.2%)	9 (1.6%)	568 (100.0%)
合計	354 (36.4%)	138 (14.2%)	401 (41.3%)	45 (4.6%)	34 (3.5%)	972 (100.0%)

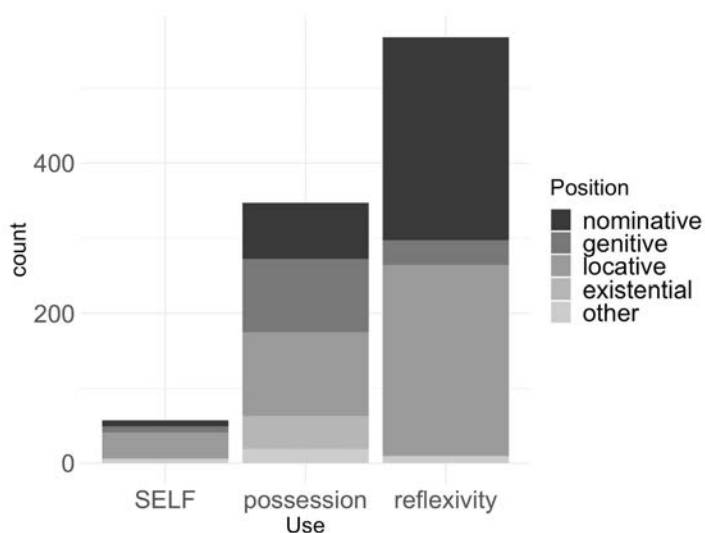


図 3. 出現位置の分布

ここからは、表 4 と図 3 で示した分布に基づいて、用例ごとに *sarili* が節内のどのような位置に出現する傾向にあるかを報告する。まず、「自分」用法では *sarili* を含む句は場所格で標示される傾向にある。(26) を参照してほしい。

(26) *Ang negatibo=ng pakikipagupas sa sarili ay maka-pagpapasama ng*
 NOM negative=LK conversation LOC self PRED NVOL.AV-corrupt GEN
pakiramdam mo.
 feeling 2SG.GEN

‘It is the negative conversation with you that corrupts your feeling.’ (vdocuments.site)

(26) では、文脈次第で当人が決まるような「自己」を表すために *sarili* は場所格で現れている。

「自分」用法の *sarili* が場所格で多く出現するのは、慣用的に用いられる表現がいくつも存在しているためであると考えられる。*sarili* が場所格で現れる用例としては他にも、*tiwala sa sarili* ‘self-confidence’、*pagtatanggol sa sarili* ‘self-defense’、*pagpipigil sa sarili* ‘self-control’ のような表現

も観察された。

次に、所有用法では *sarili* はどの位置にも大きな偏りなく出現する。*sarili* を含む句が属格で現れる (27) と、存在述語 *may* に後続する位置に現れている (28) を例示する。

(27) *Nag-ma~mahal lamang ako ng ating sarili=ng wika.*
 AV.RL-CONT~love only 1SG.NOM GEN 1PL.INCL.LOC.LK self=LK language
 ‘I just love our own language.’ (blogspot.com)

(28) *May sarili kami=ng bahay na h<in>u~hulug-an at sasakyan.*
 EXS self 1PL.EXCL.NOM=LK house LK <RL>CONT~install-LV and vehicle
 ‘We have our own house to install ourselves and vehicle.’ (blogspot.com)

タガログ語で (27) は名詞句で所有が表現される限定所有、(28) は述語で所有が表現される叙述所有である。(28) は *sariling bahay* ‘own house’ の *sarili* と語同士をつなぐリンカーという要素の間に、所有者を表す人称代名詞 *kami* ‘we’ が割り込んでいる。

所有用法の *sarili* が節内のどの位置にも現れるのは、*sarili* を含む名詞句の意味役割が特定の意味役割に限られないからであると考えられる。所有用法の *sarili* は基本的に修飾部に現れるため (第 5.1 節を参照)、*sarili* を含む名詞句全体は所有物を表現している。後述するように再帰を表す名詞句の意味役割は被動者に限られるが、所有物を表す名詞句に関しては被動者のみならずあらゆる意味役割が与えられる。したがって、所有用法の *sarili* は節内のあらゆる位置に出現する。

最後に、再帰用法の *sarili* は主格か場所格で現れやすい。それぞれの例を (29)(30) に示す。

(29) *Hindi ko na ma-gets ang sarili ko.*
 NEG 1SG.GEN IAM NVOL.PV-get NOM self 1SG.GEN
 ‘I cannot understand myself.’ (vdocuments.site)

(30) *Pero nag-ta~taka ako sa aking sarili.*
 But AV.RL-CONT~surprise 1SG.NOM LOC 1SG.LOC.LK self
 ‘But I am surprised at myself.’ (pinoyerotica.com)

再帰を表す (29)(30) はともに、動作主と被動者のどちらも話者を指示し、被動者句に *sarili* が現れている。動詞が被動者ヴォイスである (29) では *sarili* は主格で現れ、動作主ヴォイスである (30) では *sarili* は場所格で現れている。

一方で、動詞が動作主ヴォイスである場合に、被動者である *sarili* を含む句が属格で現れる用例も見られるが稀である。少ないながらも観察された用例を (31) に示す。

- (31) *Sa halip, kung mag-a~ayuno kayo, mag-hilamos at mag-ayos kayo ng*
LOC instead COND AV-CONT~fast 2PL.NOM AV-wash.face and AV-arrange 2PL.NOM GEN
sarili, [...]
self
'If you fast, wash your face and arrange yourself instead.' (azdoc.site)

再帰用法で *sarili* が主格か場所格で現れやすいことは、タガログ語で被動者句がそれらの格で現れやすいことの反映である。動作主と被動者が同じ対象を指示して同一指示である場合、*sarili* は被動者句で用いられる。語用論的卓立性が高ければ主格標示され、主格標示されなければ場所格で現れる傾向にあると考えられる。

このように、*sarili* の用法が違えば節内のどこに現れるかも異なる。「自分」用法の *sarili* は場所格で、再帰用法の *sarili* は主格または場所格で現れやすい。一方で、所有用法の *sarili* に関しては現れる格に大きな偏りはなく、節内のどの位置に出現する用例も一定数観察される。*sarili* の節内の出現位置は、用法ごとに異なる傾向を見せるのである。

6. 議論

本節ではコーパス調査の結果を踏まえ、第 6.1 節でタガログ語の *sarili* がどのように使用されているかを結論付ける。第 6.2 節では、*sarili* の用法獲得についての 2 つの仮説を議論する。

6.1. *sarili* はどのように使用されるか

タガログ語の *sarili* は 3 つの用法で使用される。本論文では、*sarili* の用法として (i) 「自分」用法、(ii) 所有用法、(iii) 再帰用法を提案した。1 つ目の「自分」用法は、「自分自身」を表す内容語としての用法である。2 つ目の所有用法は、所有関係における排他性を表す機能語としての用法である。3 つ目の再帰用法は、動作主の行った行為が動作主自身に返ってくる事態を表す機能語としての用法である。

sarili によって表現される意味が違えば、その出現位置も異なる。今回調査した用例では、3 つの用法のうち「自分」用法の *sarili* は全て主要部で、所有用法の *sarili* は全て修飾部で現れた。一方で、再帰用法の *sarili* は主要部でも修飾部でも出現したが、主要部で現れる用例に大きく偏っていた。節内で出現する位置については、慣習的な表現が含まれる「自分」用法では *sarili* は場所格で用いられる傾向にある。再帰用法では *sarili* が主格か場所格で用いられる傾向にあり、その傾向はタガログ語で被動者句がそれらの格で現れやすいことを反映している。一方で、所有用法で *sarili* を含む名詞句にはあらゆる意味役割が与えられるため、*sarili* はどの位置でも大きな偏りなく使用される。本論文ではじめて *sarili* の用法と現れる位置の結びつきを量的に調査したことによって、*sarili* で表現される意味が違ふとその統語的な性質も異なるという重要な発見をした。

6.2. *sarili* の用法の獲得

タガログ語の *sarili* がもつ 3 つの用法の存在は、*sarili* の内容語から機能語への文法化を示唆する。文法化は「具体的な意味を持つ開いた語類に属する語彙的な要素 (lexical item) が、抽象的な意味を持つ閉じた類に属する文法的な要素 (grammatical item) に」(古賀 2015: 199) 変化する現象である。前半の「具体的な意味を持つ開いた語類に属する」のは内容語で、後半の「抽象的な意味を持つ閉じた類に属する」のは機能語である。ここでタガログ語の *sarili* について考えると、「自分」用法の *sarili* はより具体的に「自分自身」を意味する内容語である。一方、所有用法の *sarili* は所有者の強調という抽象的な意味をもたらす機能語である。再帰用法の *sarili* も、同一指示かつ動作主自身に行為が返ってくることを文法的に表す機能語である。これらの用法間の違いは、*sarili* のもつ具体的な意味が希薄化し、所有の強調や再帰という抽象的な意味を表すようになり生じたものとして解釈することができる。

今回調査した用法の分布から、現在タガログ語の *sarili* は機能語として中心的に使用されていると言える。第 4.4 節で、*sarili* の用例のうち半数以上が再帰用法で用いられ、ついで所有用法の用例が多いという結果を示した。タガログ語の *sarili* が内容語から機能語へと内的に文法化している過程であるとするならば、その文法化は終盤まで進行している。*sarili* が具体的に「自分自身」を意味する内容語として使用されることは今や少なくなり、所有の強調や再帰という抽象的な意味を表す機能語として使用される頻度が高いのである。

先行研究で指摘されている通言語的な意味変化の傾向も、タガログ語の *sarili* が「自分」を意味する内容語から再帰を表す機能語へと文法化したとする仮説を支持する。通言語的に名詞は再帰標識の起源として最も一般的で、身体部位に加えて「自分」を意味する名詞が再帰標識として用いられることが多い (Zúñiga & Kittilä 2019: 230)。そのため、タガログ語でも「自分」のみを意味していた *sarili* が次第に再帰標識としての用法を獲得したという変化の経路はもつとらしい。このように *sarili* の複数の用法は、タガログ語における内的な文法化として捉えることが可能である。

一方で、タガログ語の *sarili* がもつ 3 つの用法自体がマレー語からの借用である可能性もある。第 1 節で言及したように、*sarili* はマレー語の *sendiri* を借用した語である。タガログ語が *sendiri* を借用した際に *sendiri* がもつ 3 つの用法が付随して借用されたために、*sarili* も同様に 3 つの用法を保持していると考えられることもできる。実際、マレー語の標準変種の一つであるインドネシア語でも *sendiri* は使われており、本論文で提案した「自分」用法、所有用法、再帰用法それぞれに対応する用法をもっている (Sneddon et al. 2010)。インドネシア語の *sendiri* の用例を (32)~(34) に示す。

(32) *Buku ini di-tulis oleh Pak Bambang sendiri.*

book this PV-write by Mr B. self

‘This book was written by Mr Bambang himself.’ (Sneddon et al. 2010: 156 グロスを追加)

(32) は「自分」用法にあたり、*sendiri* は *Pak Bambang* その人自身を指示している。(32) のように「自分」用法の *sendiri* が名詞と共起する点はタガログ語の *sarili* と異なる。一方で、節内に同一指示の2つの参加者が存在しないため再帰的な事象は表されず、*sendiri* によって表現されているのが「自身」である点はタガログ語の *sarili* と共通している。

インドネシア語の *sendiri* も、(33) のように所有の関係を強調することができる。

(33) *Budi harus mem-bayar diri kantong=nya sendiri.*

B. must AV-pay self pocket=DEF self

‘Budi must pay from his own pocket.’ (Sneddon et al. 2010: 157 グロスを追加)

(33) では、*sendiri* は *kantongnya* ‘pocket’ の所有者を明示している。動作主と所有者は同じく *Budi* を指示し同一指示の関係にあるものの、動作主自身に戻ってくる何かしらの行為は表現されていない。タガログ語の *sarili* と同様に、他の誰でもなく *Budi* 自身のポケットから (お金を) 払うことを *sendiri* によって強調している。

最後に、インドネシア語の *sendiri* も、(34) のように再帰を表現することができる。

(34) *Dia gemar men-candai diri=nya sendiri.*

3SG like AV-joke self=DEF self

‘He’s fond of joking at himself.’ (Sneddon et al. 2010: 213 グロスを追加)

(34) では、動作主 *dia* ‘he’ と被動者 *dirinya sendiri* ‘himself’ はともに「彼」を指示し同一指示である。さらに、動作主の被動者に対する行為が、両者が同一指示であるために、動作主自身に戻ってくる事象を表している。

このように、現在のインドネシア語の *sendiri* には「自分」用法だけでなく、所有用法や再帰用法に対応する用法まで全て揃っている。そのため、タガログ語が *sendiri* を借用した古い時代のマレー語にも3つの用法が既に備わっていたのではないかと仮定することも可能である。したがって、タガログ語の *sarili* の3つの用法は、マレー語の *sendiri* の3つの用法をそのまま借用したものとも考えられる。

このように、タガログ語の *sarili* の3つの用法には、タガログ語内での意味変化という文法化の仮説とマレー語からの借用という言語接触の仮説の2つがある。本論文では、*sarili* の3つの用法獲得の手段として、2つの仮説どちらが正しいかを決定付けることはできない。1つ目の仮説として、タガログ語の *sarili* が「自分」を意味する内容語から再帰を表す機能語へと独自に文法化したとする仮説を提示した。この場合には、*sarili* の3つの用法に対応する用法を現在のインドネシア語の *sendiri* ももつため、タガログ語の *sarili* とマレー語の *sendiri* でそれぞれ同じ経路の変化が生じたと考えられる。再帰標識の起源が「自分」を意味する語であることは通言語的に報告されている変化であるため、同じ変化がタガログ語とマレー語の両方で起

こっていたとしても不思議ではない。そして2つ目の仮説は、タガログ語がマレー語の *sendiri* をその語がもつ用法ごと借用したとする仮説である。どちらの仮説もタガログ語の *sarili* とマレー語の *sendiri* が同じ3つの用法をもつことを説明することができるため、現時点でどちらか一方を *sarili* の3つの用法獲得の手段として決定付けることは難しい。今回は2019年時点でウェブ上に存在していたテキストデータを用いて調査したため、どちらの仮説が正しいかを判断するためには時代を遡ってデータを分析する必要がある。今後の課題としたい。

7. まとめ

本論文では、タガログ語の *sarili* がどのように使用されているかをコーパス調査に基づいて分析した。分析の結果、タガログ語の *sarili* は (i) 「自分」用法、(ii) 所有用法、(iii) 再帰用法で使用されていることを明らかにした。これらの用法間の特徴の違いについては、マレー語からの借用という言語接触の仮説に加えて、「自分」用法として用いられる内容語から所有用法と再帰用法で用いられる機能語への文法化の仮説によっても捉えることができる。こうして、再帰用法と所有用法に加えて *sarili* の「自分」用法を新たに切り出し、*sarili* 独自の意味変化の可能性を提示することで、タガログ語の個別言語的研究に貢献した。

略号一覧

AV	actor voice	NOM	nominative
COND	conditional	NVOL	non-volitional
CONT	continuous	P	personal name/kinship term
DEF	definite	PL	plural
EXCL	exclusive	PRED	predicate marker
EXS	existential	PV	patient voice
GEN	genitive	Q	question
IAM	iamitive	RL	realis
INCL	inclusive	SG	singular
LK	linker	1	first person
LOC	locative	2	second person
LV	locative voice	3	third person
NEG	negation		

参考文献

- Blust, Robert (2013) *The Austronesian Languages*. Revised edition. Canberra: Asia-Pacific Linguistics.
- Foley, William A. & Robert D. Van Valin Jr. (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kilgarriff, Adam, V.t Baisa, Jan Bušta, Miloš Jakubček, Vojtěch Kovář, Jan Michelfeit, Pavel Rychlý & V.t

- Suchomel (2014) The Sketch Engine: Ten years on. *Lexicography* 1: 7–36.
- 古賀裕章 (2015) 「文化化」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』: 199–200. 東京: 三省堂.
- Kroeger, Paul (1993) *Phrase Structure and Grammatical Relations in Tagalog*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- 長屋尚典 (2015) 「語類」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』: 95–97. 東京: 三省堂.
- Schachter, Paul & Fe T. Otones (1972) *Tagalog Reference Grammar*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Sneddon, James N., Alexander Adelaar, Dwi Noverini Djenar & Michael C. Ewing (2010) *Indonesian Reference Grammar*. 2nd edition. St Leonards, NSW: Allen & Unwin.
- Zúñiga, Fernando & Seppo Kittilä (2019) *Grammatical Voice*. Cambridge: Cambridge University Press.

A Descriptive Study of Tagalog *Sarili*

HAYASHI Mai

maimaimaingay@gmail.com

Keywords: Tagalog, content words, function words, reflexivity, possession, grammaticalization, borrowing, corpus

Abstract

The Tagalog word *sarili* is a crucial noun in that it means ‘self’ as a content word and it also expresses reflexivity and emphasis of possession as a function word. Interestingly, there are clear differences between *sarili* as a content word and *sarili* as a function word in terms of the frequency and syntactic position of each. However, it has not been investigated how *sarili* is used in practice. Therefore, this paper describes and analyzes the uses of *sarili* based on data collected from a web corpus. Through the analysis, I propose that there are three uses of *sarili*: (i) SELF use, (ii) possession use, and (iii) reflexivity use. Among these uses, all of the SELF uses appear as heads, and all of the possession uses appear as modifiers, and almost all of the reflexivity uses appear as heads. In terms of its position in the clause, different tendencies are observed depending on the uses. By newly dividing the SELF use from the possession and reflexivity uses and showing the properties and distributions of the uses, I hypothesize that *sarili* has been grammaticalizing from a content word to a function word.

(はやし・まい 東京大学大学院)